

中国のほんの話(70)

## 君島久子訳『西遊記』

～ 大人の読む本として立派に通用する子ども向けの本 ～

蔭山達弥



読者諸兄は「桐壺源氏」ということわざをご存知だろうか。「桐壺」は世界最古の長編小説である『源氏物語』五十四帖の第一帖、『源氏物語』を読み始めた者が「桐壺」の巻で止めてしまうことからきた言葉で、飽き易くて勉強が長続きしないこと、また中途半端な読書の例えである。

閑話休題、ご存知中国の愉快で雄大な物語『西遊記』といえば、石から生まれたやんちゃで利口なサル（きりつぽげんじ）の孫悟空を思い起こす人がほとんどだと思う。筆者にとって『西遊記』は日本テレビ開局25周年記念番組として、1978年10月から翌年4月にかけてテレビで放送されたドラマ『西遊記』シリーズで、三蔵法師は夏目雅子、孫悟空は堺正章、猪八戒は西田敏行、沙悟浄は岸边四郎だった。このドラマ『西遊記』は好評で、『西遊記Ⅱ』も半年後に放送が始まった。さて、岩波文庫から出ている『西遊記』が現存する日本語訳本の中で、最も優れた完訳本とされているが、一般向けに出ている『西遊記』を最後まで読み通した人は、一体どれだけいるだろうか。『宝島』、『ロビンソン・クルーソー』、『ロビン・フッド』など原作を子ども向けに書き直したリライトものの中で君島久子の訳した『西遊記』（福音館文庫上中下3巻、福音館書店2004、初版は福音館古典シリーズハードカバー上下2巻として1975年刊行）を、凜呼（むかいさとし）たる名訳と称賛したのは向井敏（1930-2002）である。

30年来肝胆相照らす仲の開高健（1930-1989）、谷沢永一（1929-2011）、向井敏の今は亡き論客三人が、1980年10月17、18日開高健宅で、同年11月21、22、23日、谷沢永一宅で、5日間25時間にわたって行なわれた鼎談をもとに1981年潮出版社から刊行され、2012年7月10日にちくま文庫から再刊された『書齋のポ・ト・フ』の「末はオセロかイヤーゴか\*児童文学序説」の中で、向井敏は次のように述べている。「一般論としては開高の言う通りなんだろうけれど、リライトものにもなかなか立派なものもあることはあるのよ。たとえば、君島久子の訳した『西遊記』。これは形は翻訳ではあるけれども、谷沢がさっき言ったような意味でのリライトの本筋（名作の書き直しだったら、子ども向けと思わないでやればいいわけじゃないかな。）をおさえたものと言えるんじゃないか。この訳がじつにいい。感心した。いちおう子ども向けとして、小学校上級以上という名目で売られているけれど、子どもに

だけわかればいいという甘えた書き方ではなくて、大人の読む本として立派に通用する。（中略）一般向けに出ている『西遊記』より文章がずっと上等だね。原文の感触をていねいに取り込んでいるし、むずかしい漢語も妙にくだいたりしないでそのまま使っている。子どもに対するサービスといえば、ルビを多くしたこと、会話の文に当世風の味を加えたことぐらいだろうな。」開高健も「うん。これは凜として筋が通っていて、近ごろ気持ちよく読めたもののひとつだな。こういうのが売れてほしいなあ。売れ行きのほうはどうなんだろう。」と相槌を打っている。

では君島久子の大変読みやすい、穏やかで美しい訳文の『西遊記』をどうぞ。「その夜三蔵は、盗まれた袈裟のことを考えてまんじりともしなかった。夜が明けると、悟空はがぼとはね起き出かけようとするので、「どこへ行くのだ」と聞くと、「こんどのことは、菩薩様もあんまりだ。ここにお寺を持ち、この人びとの香火を受けながら、隣りに化け物を住まわせておこなうて。ひとつばしり行って談判し、ここにおいでただいて、妖魔を撃ち袈裟を取り返してもらいます」「いつもどるのか」と三蔵。「はやければ、朝飯の終わるころ、てこずってもお昼ごろまでにはやってみます。では」と言ったかと思うと、すでに悟空の姿はなかった。悟空、またたくまに南海に到着した。雲をとどめて眺めると、海は洋々とほるかに、水は天に連なるばかり、瑞気は山川を照し、山峰は高くそびえ、千様の奇花、百般の瑞草、風は宝樹を揺がし、紫竹の林中に孔雀啼く。」（第十七回）

君島久子が本物の『西遊記』に出会ったのは、慶應大学の恩師、奥野信太郎宅にあった紺色の帙入り本、恩師から訳すようにすすめられたことがきっかけだった。

かげやま たつや（非常勤講師・中国文学）